

国立国語研究所学術情報リポジトリ

A lexical family : Frog,toad,tadpole in the L.A.J.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本堂, 寛, HONDO, Hiroshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001766

「かえる」・「ひきがえる」・「おたま じゃくし」の名称

—『日本言語地図』から—

本 堂 寛

はじめに

『日本言語地図第5集』には、「かえる（蛙）」（総称）・「ひきがえる（蟞，蟾蜍）」、「おたまじゃくし（蝌蚪）」の三つの関連項目を扱った6枚の地図（第218図～第223図）がある。これらの地図には、カエル・ヒキ・ビキなど同一または同類語形のそれぞれの分布がみられ、したがって6枚の地図を重ね合わせて言語地理学的にみることによって、「かえる」・「ひきがえる」・「おたまじゃくし」を意味するこれらの語の歴史・相互の関係をさぐる事が可能である。本論ではその解釈を試みるものである。

1 分 布

解釈に必要と考えた語の分布を、6枚の地図から取り出して新たに3枚の地図に再構成して示す。もとより6枚の地図をそのまま3枚の地図に転写することは不可能なので、ここではすでに一つの解釈を加えた地図を示すことになる。

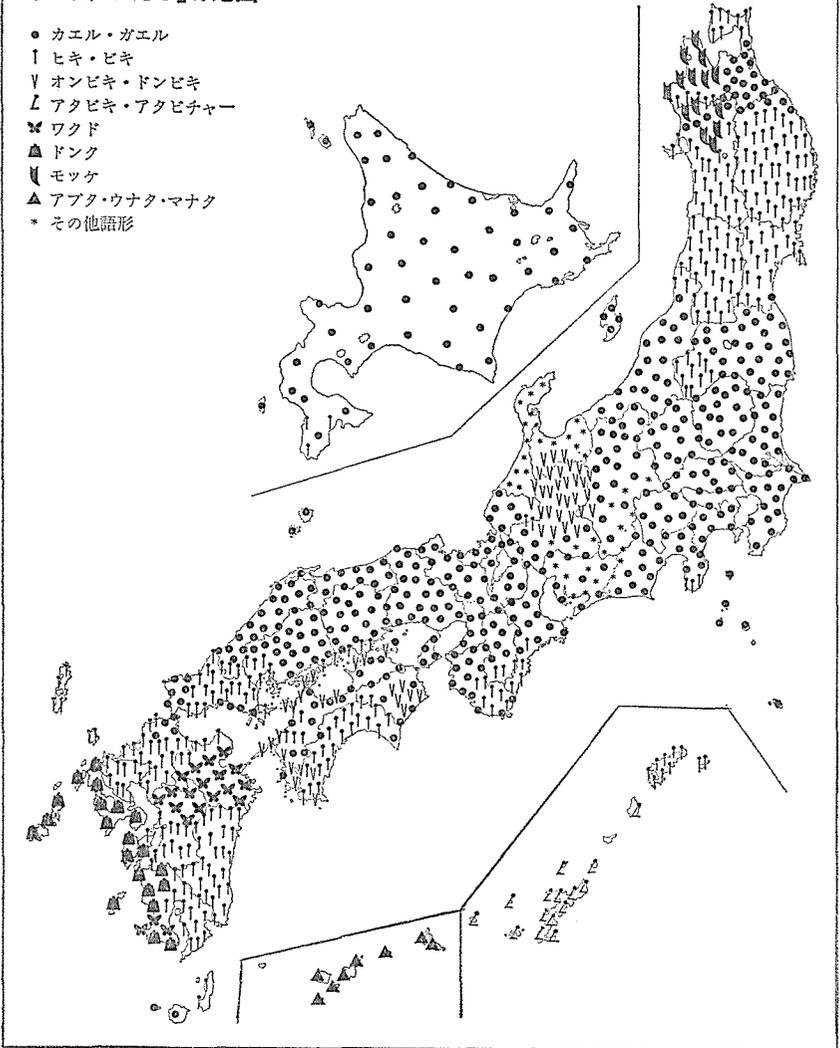
2 解 釈

2.1 解釈の1

第1図「かえる」・第2図「ひきがえる」・第3図「おたまじゃくし」の3枚の地図を通して見て、この三つの項目の一つ以上にヒキ・ビキ・オオヒキ・オオヒキダ・オンビキ・ドンビキ・アタビキ・アタビチャー・ヒキガエル・ヒキ（ノ）コ・ビキ（ノ）コ・アタビチャーヌカーなどヒキ類の分布している地域は、全国のほとんどにわたっている。わずかに先島諸島にこの類の分布を見ない。そしてこのヒキ類は、第1図「かえる」ではぼ国の中央から遠隔の地域に分布しており、第3図「おたまじゃくし」でもヒキ類が国の中央から遠隔の東

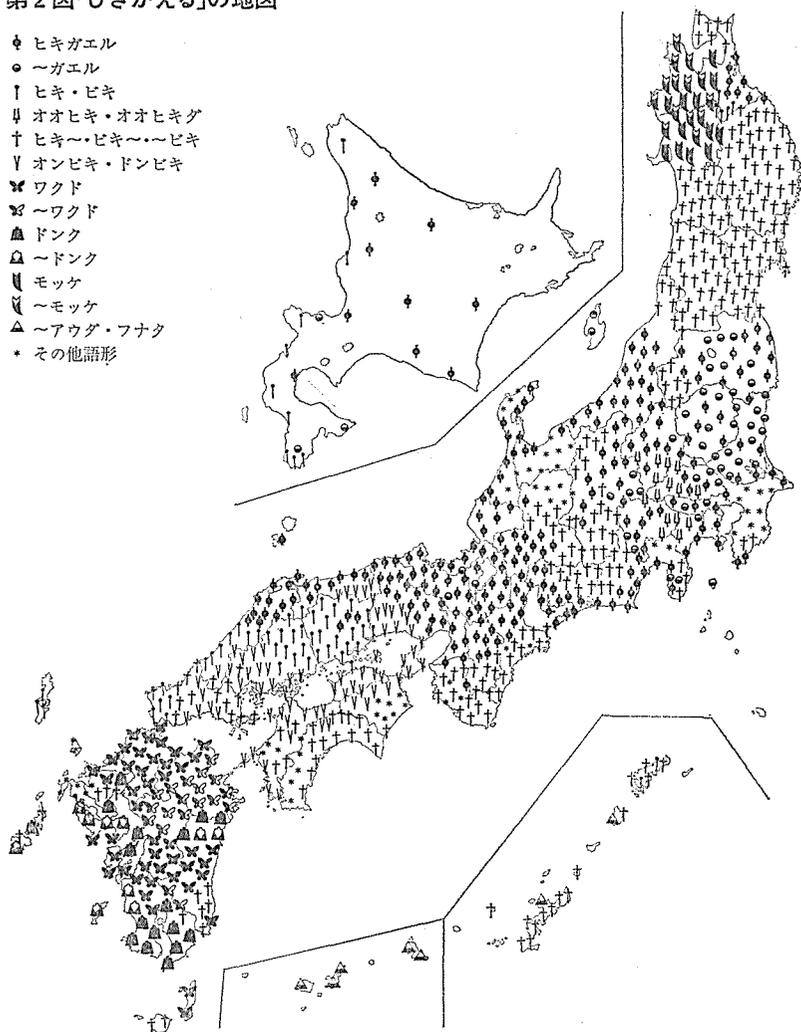
第1図「かえる」の地図

- カエル・ガエル
- ↑ ヒキ・ビキ
- ∨ オンビキ・ドンビキ
- ∟ アタビキ・アクビチャー
- ✕ ワクド
- ▲ ドンク
- ∟ モッケ
- ▲ アブク・ウナク・マナク
- * その他語形



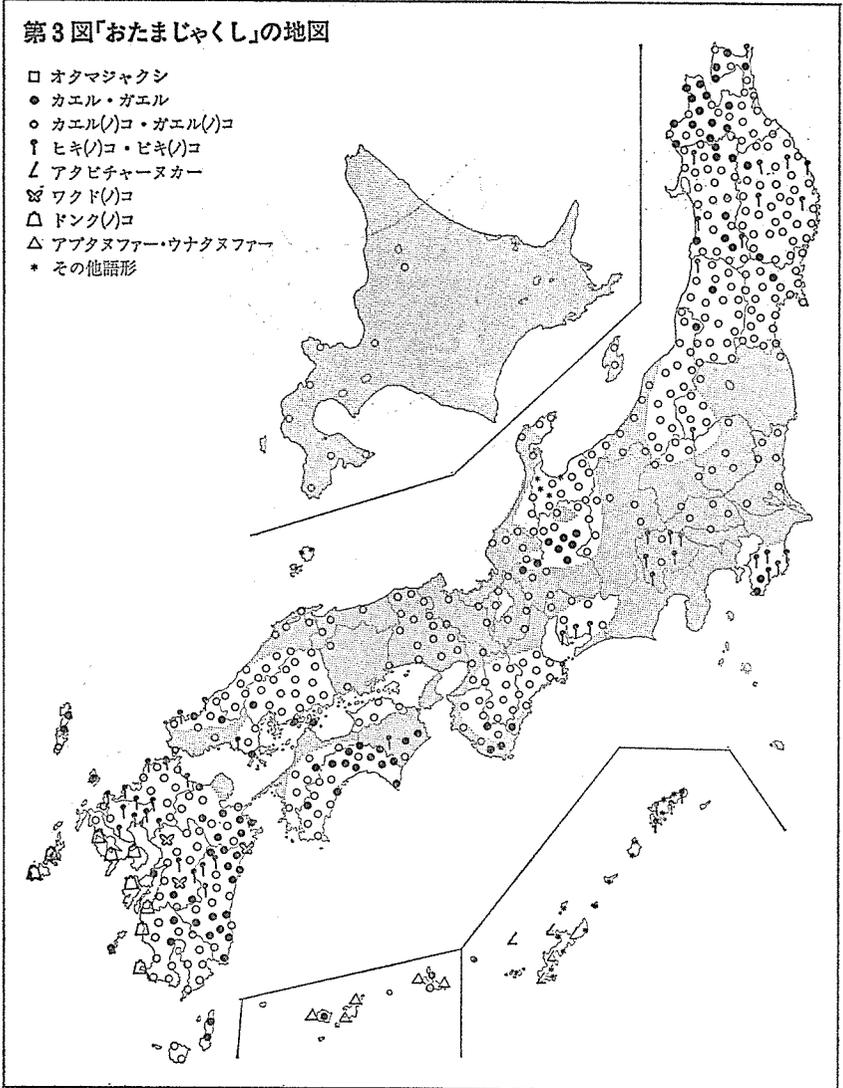
第2図「ひきがえる」の地図

- ♠ ひきがエル
- ～ガエル
- ↑ ひき・ビキ
- ⊃ オオヒキ・オオヒキダ
- † ひき～・ビキ～・～ビキ
- ∨ オンビキ・ドンビキ
- ✂ ワクド
- ✂ ～ワクド
- △ ドンク
- △ ～ドンク
- ⊃ モッケ
- ∨ ～モッケ
- △ ～アウダ・フナダ
- * その他語形



第3図「おたまじゃくし」の地図

- オクマジャクシ
- カエル・ガエル
- カエル(ノ)コ・ガエル(ノ)コ
- † ヒキ(ノ)コ・ビキ(ノ)コ
- ∟ アクビチャーヌカー
- ☒ ワクド(ノ)コ
- △ ドング(ノ)コ
- △ アブタヌファー・ウナグヌファー
- * その他語形



北、九州、奄美・沖縄本島に分布しているほか、それ以外の地域でも他地域との交渉が遮絶していると思われる地域にまとまって分布または点在しているように見える。これらのことから、まず、「かえる」および「おたまじゃくし」の名称は、ヒキ類が、古く全国の大部分を覆って分布していたと見る。また第2図「ひきがえる」では、ヒキ類が全国に広く分布しているし、その中でもカエル以外の語形とヒキ・ビキの複合したヒキ～・ビキ～・～ビキが、東北、中国・四国、奄美・沖縄という国の中央から遠隔の地域に広く分布しているほか、関東、中部、近畿南部にもまとまって見られる。とすると、「ひきがえる」の名称もまた古くはヒキ類であったと見ることができる。これに対して、第1図「かえる」において、ヒキ類とともに全国に広い分布領域をもつカエル・ガエルは、北海道、東北北東部を新しい時期の分布として除くと、福島・新潟から関東・中部・近畿を経て中国および四国北部までのいわば国の中央部と連続した地域に分布しており、東北の大部分、九州、沖縄にはその分布をほとんどみることができない。このことから、「かえる」・「ひきがえる」の名称としてのヒキ類は新しいカエル類が分布する以前の古い勢力であり、もっとも古くは、「かえる」と「ひきがえる」とは同じ名称ヒキまたはビキであったと見るのである。現在、「かえる」の名称カエルの分布領域になっている関東に、「ひきがえる」の名称としてオオヒキまたはオオヒキダが分布している。これは、かつてこの地域でも「かえる」がヒキであったためにそれと「ひきがえる」を区別する必要上、新造した語形であると考え。ひとつの傍証となろう。ただ、ヒキ類の分布の及ばなかった国の南端の先島諸島では、アブタ・ウナタ・マナタが「かえる」・「ひきがえる」をまとめた名称になっていた。かくして、「おたまじゃくし」も古くは「かえるの子」という意味を示してヒキ(ノ)コ・ビキ(ノ)コなどヒキ類であってそれが先島諸島を除く全国に広く分布していた。

この古い時期のあと、「かえる」と「ひきがえる」とにそれぞれ異なった名称を与えようとする傾向が生じる。国の中央部地域から「かえる」の名称としてのカエル・ガエルが新しい語として広がるにつれて、もともとのヒキ類は「ひきがえる」の名称となっていく。新しいカエル類の勢力のまだ及ばない中央部地域から遠隔の地域でもそれぞれ区別しようとする傾向を示すようにな

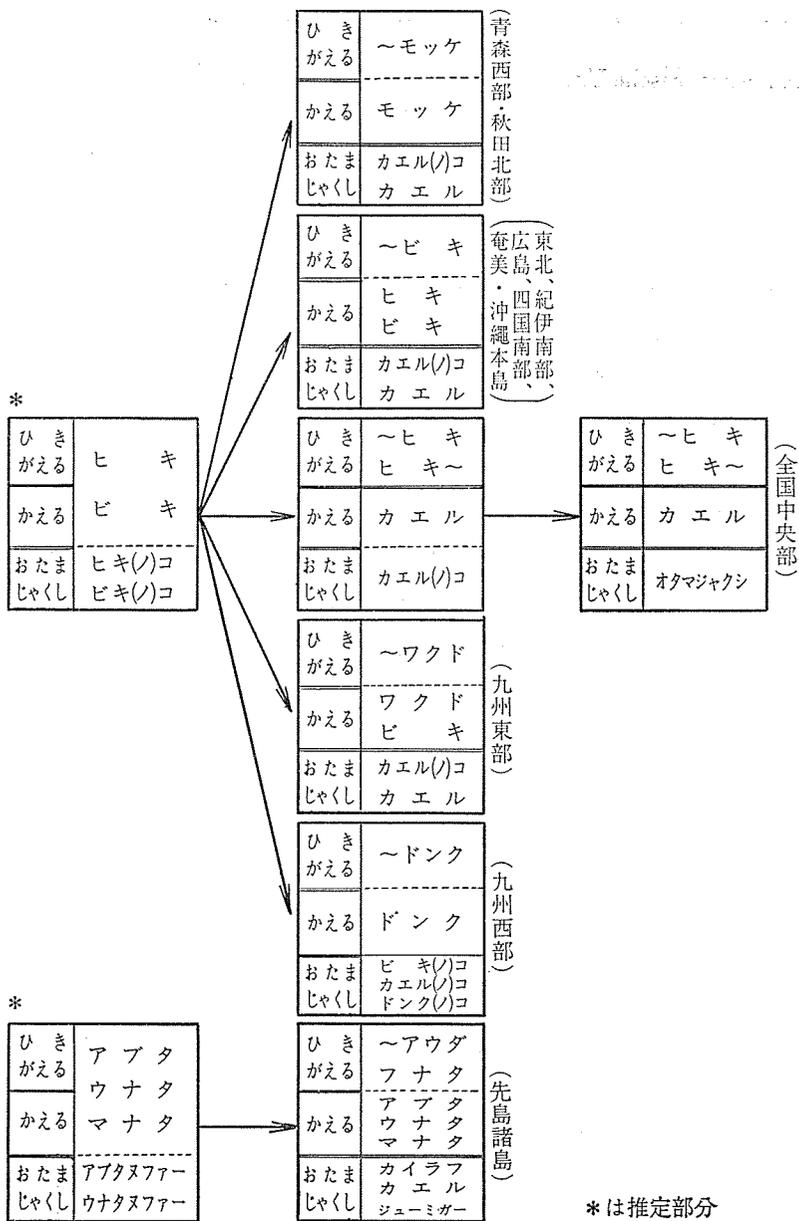
る。青森西部から秋田北部にかけての地域では独自語形モッケを生み出し、青森・秋田の県境地域のようにもとのヒキ類によって「かえる」を、新しいモッケによって「ひきがえる」を示したり、青森西北部・秋田北部地域のように単独語形モッケによって「かえる」を、ウシモッケ・ムカシモッケなど複合語形によって「ひきがえる」を示す地域が見られるようになる。九州についても同じことが言える。主として九州東部地域で生まれ広がったワクドは、北部と南部地域で「ひきがえる」の名称となり、これらの地域ではもとのヒキ類が「かえる」の名称として残る。大分から熊本にかけての地域では単独語形ワクドが「かえる」の名称に、複合語形ウシワクド・カサワクド・カマワクドなどが「ひきがえる」の名称になる。新しい語形ドンクを造り出した九州西部地域ではもとのヒキ類をほとんど捨ててしまい、単独語形ドンクによって「かえる」を、複合語形ショーケードンク・オカマドンクなどによって「ひきがえる」を示すようになる。さらに、九州で独自に造られたこのワクドとドンクが分布を広げるにつれその接触によってさまざまな混交形を生み出し分布領域を複雑に交錯させるようになった。青森から秋田にかけてのモッケと、九州のワクド・ドンクを、「かえる」・「ひきがえる」を区別しようとする傾向によってその地域で独自に生み出された語の代表的例として示したが、このような現象は、地図には具体的な語形を示さなかった能登半島、岐阜中北部、近畿南部、四国、長崎などにもみられる。また、「かえる」と「ひきがえる」いずれもヒキ類である地域でも次第に両者を区別しようとする。東北地方の中には、「かえる」を単独語形ビキによって示し、「ひきがえる」を、同じビキを語形に含むフクダビキ・マスビキなど複合語形によって示すとともにフクダ・フルダのようにヒキの派生形によって示す地域もあらわれる。広島から山口にかけての地域、紀伊半島南部、四国南部、奄美・沖縄本島およびその周辺地域なども同じような傾向を示す。先島諸島はヒキ類の分布の及ばなかった唯一の地域であるが、ここでも「かえる」がアブタ・ウナタ・マナタなど、「ひきがえる」がフナタ・～アウダなどのように別名称をもつようになる。

一方、「おたまじゃくし」についてみると、第3図「おたまじゃくし」ではカエル(ノ)コ・ガエル(ノ)コなどカエル類が北海道南部から国の中央部を経て

九州さらに先島諸島にいたるまでの全国の広い地域に分布している。つまり「かえる」の新しい名称カエルが国の中央部から全国に分布していくともなっていて、「おたまじゃくし」の新しい名称カエル(ノ)コが古いヒキ(ノ)コの分布地域に広がっていった。ところが、「かえる」におけるカエル類の分布ともなっていて広がるべき「おたまじゃくし」のカエル類は、第1図「かえる」におけるカエル類の分布よりさらに広い分布領域をもっている。これについては次のように解釈する。「かえる」の古い名称のヒキ類やその地域で独自に生まれた名称をもつ地域ではそれらの語の勢力が強固なため、新しく中央から広がってきた名称カエルをまだ受け入れるにいたっていない。そこで「おたまじゃくし」のみに、新しく分布を広げてきたカエル(ノ)コを受け入れ古いヒキ(ノ)コが消滅しつつあるのである。このように、「かえる」に受け入れなかった新しいカエル類を「その子」である「おたまじゃくし」のみに受け入れたのは、「かえる」と「ひきがえる」の名称を別にする傾向とともに「かえる」(または「ひきがえる」)と「おたまじゃくし」の名称をも別にする傾向が生じてきたためではないかと考える。これは、「かえる」と「おたまじゃくし」との生物学的形態の違いによるだろうか。そこで「かえる」にヒキ類などカエルと全く別類語をもつ地域に「おたまじゃくし」のカエル(ノ)コが急速に分布を広げていき、さらにそのうちのいくつかの地域では、「おたまじゃくし」にあえて「かえるの子」を意味するカエル(ノ)コという語形を採る必要はないため、カエル(ノ)コから一段飛躍した新語形カエルを「おたまじゃくし」の名称として採用するようになったと考えるのである。この「かえる」と「おたまじゃくし」の名称をも別にしようとする傾向は国の中央部地域においてもあらわれる。第3図「おたまじゃくし」では新しい語類オタマジャクシの新しい広がりとしてみられる。しかもこのオタマジャクシの分布領域は、第1図「かえる」のカエルの分布領域とかなり似かよった領域を示している。

解釈の1での歴史的変化過程を図示すると次ページのようになる。

解釈の1で問題となる点が二つある。その一つは、第1図「かえる」におけるカエル類の分布領域と第3図「おたまじゃくし」におけるカエル類の分布領域との不一致性についてである。このことについてはすでに一応の解釈を加えた



が、「おたまじゃくし」の新しい名称カエル類の分布が、「かえる」における新しい名称カエル類の分布と無関係にこれほど急速にこれほど遠隔地域にまで分布するものであるかどうかという点。二つには、第3図「おたまじゃくし」では、カエル(ノ)コの広い分布の中に、あるいはまとまってあるいは点的に単独語形カエルが分布していることである。このことについても一応の解釈をほどこしたが、カエル(ノ)コの分布地域とカエルの分布地域を第1図に重ね合わせてみて、「おたまじゃくし」のカエル(ノ)コ・カエルいずれの語形も、「かえる」においてヒキ・ビキなどカエルとは別類語の分布がみられる地域に分布しているということでもまったく同じ条件なのに、隣接した地域・地点同士で一方ではカエル(ノ)コを採用し一方ではカエルを採用することがそれほど簡単に行なわれるものだろうか、ということである。

2.2 解釈の2

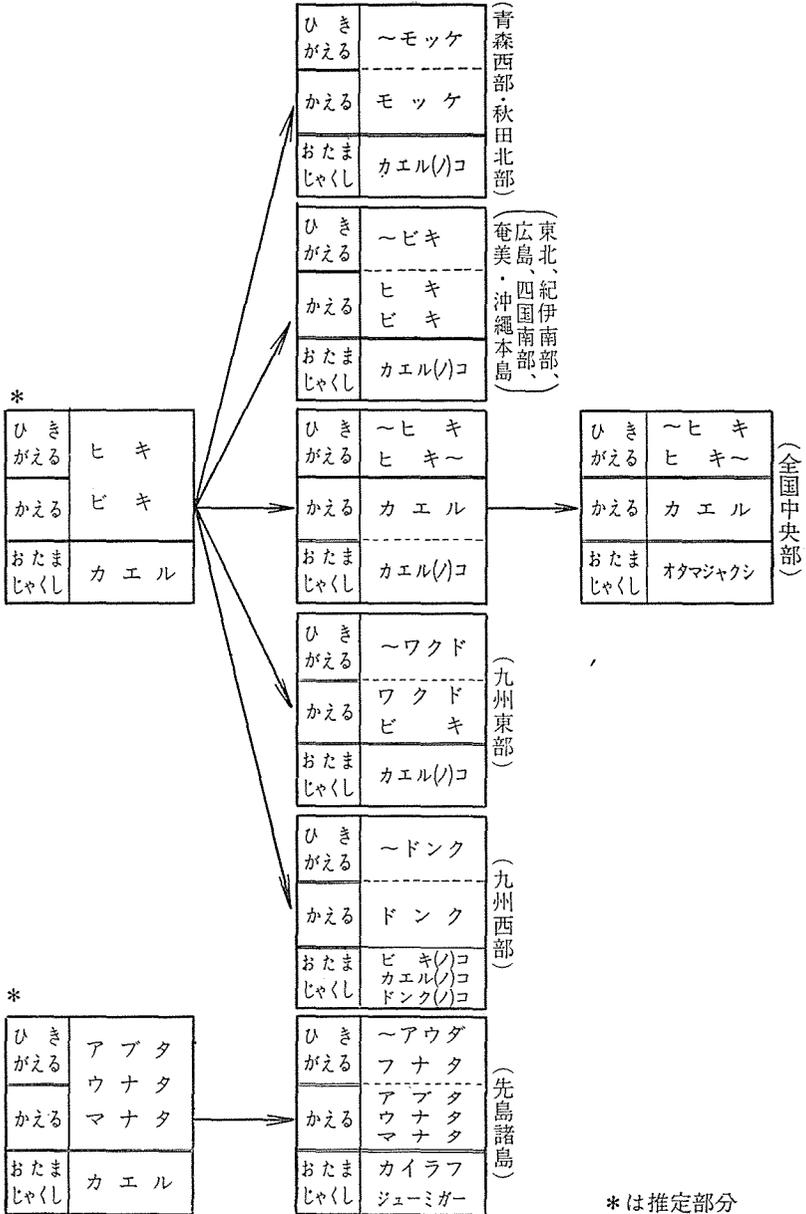
解釈の1では、もともと「かえる」と「ひきがえる」とを区別しない名称ヒキ類が全国に広く分布しており先島諸島のみアブタ・ウナタ・マナタが分布していたと考えた。解釈の2もそのことでは同じ出発点に立つ。そして、解釈の1では、「おたまじゃくし」のもっとも古い名称は、「かえる」・「ひきがえる」のもともとの名称と同じ語類のヒキ(ノ)コ・ビキ(ノ)コであり先島諸島はアブタヌファー・ウナタヌファーであるとした。ところが、第3図「おたまじゃくし」をみると、単独語形カエルが、下北半島、青森西部から秋田北部にかけての地域、秋田南部、宮城北部、山形の一部、新潟北端、千葉南端、岐阜北部、紀伊半島南端、中国西部、四国南部、九州東部、対馬、壱岐、甌島、種子島、八重山などほぼ国の中央部から遠隔の地域または辺境の地域に残存的に分布している。このことから、解釈の2では、「おたまじゃくし」のもっとも古い名称はヒキ(ノ)コ・ビキ(ノ)コではなく、カエルであってそれがかつては青森から八重山まで広く全国に分布していたと見るのである。

次の時期、「かえる」と「ひきがえる」を区別してそれぞれ別の名称を与えようとする傾向が生じ、国の中央部地域では主として「ひきがえる」にもともとの名称ヒキ類をあて、「かえる」には新しい名称としてカエル類をあて、それが次第に全国に広まっていったと見る。この見方も解釈の1と同じである。

ただ解釈の1の場合、「かえる」の名称として採用された語形カエルはまったく恣意的に選ばれたものにすぎなかったのであるが、ここでは、「かえる」の新語形カエルは、新しく造語したり「かえる」と無縁の事物から借用したものではなく、「かえる」と密接なつながりをもつ「おたまじゃくし」の名称カエルをそのまま借用したと見るのである。「かえる」の新たな名称カエルの分布の広がりにつれて、「おたまじゃくし」は「かえるの子」であるという意識から、「おたまじゃくし」の名称としての新しい語形カエル(ノ)コが全国に分布していく。「かえる」のもともとの名称ヒキ・ビキやそれらのあとに地域の独自語形として生まれたモッケ・ワクド・ドンクなどの勢力の強いところでは、「かえる」の新しい名称としてのカエルが入り込まないために依然として「おたまじゃくし」の古い語形カエルを保存しているが、それらの地域でも「おたまじゃくし」に新しい名称カエル(ノ)コを受け入れてこの語の分布を広げていったため、古い語形カエルの勢力は次第に衰えていき、「かえるの子」という意味を分り易く示すカエル(ノ)コに代わっていく。そしてさらにそのあと、解釈の1の見方と同じく、「かえる」と全く違う新しい名称オタマジヤクシを国の中央部地域で生み、急速に分布し始めたため、カエル(ノ)コもまた次第に勢力を失ない国の両端に押しやられていきつつあると見るのである。

解釈の2での歴史的変化過程を図示すると次ページのようになる。

解釈の2にも問題がある。本来「おたまじゃくし」の名称カエル(ノ)コは、「親」である「かえる」の名称カエルが現実存在し「その子」であるという意識が働いて存在すべきものである。そのカエル(ノ)コが、「かえる」の名称カエルの分布と無関係にそれよりももっと広く分布しているならば、解釈の1と同様「かえる」と「おたまじゃくし」の名称を全く別にする傾向があったからと考える。ところが、すでにもともと「おたまじゃくし」は「かえる」と別名称のカエルをもっているのである。「おたまじゃくし」のもともとの名称カエルの分布地域に新しいカエル(ノ)コが分布する理由があるうか。ここに一つの問題がある。しかも解釈の1でも問題にしたように、新しい語形カエル(ノ)コと古い単独語形カエルは連続した地域・地点に分布してその間にほとんど境界がみられないことの説明をどうするべきであろうか。二つめの問題として、



*は推定部分

もともと「かえる」・「ひきがえる」がヒキ・ビキ、「おたまじゃくし」がカエルというように「かえる」と「おたまじゃくし」との名称を区別していたのに、主として国の中央部地域の広い地域では、一旦「かえる」と「おたまじゃくし」の名称がカエルとカエル(ノ)コという同類語形にまとめられた後、ふたたび「かえる」がカエルに、「おたまじゃくし」がオタマジャクシに分かれるという過程を考えることが果して妥当であろうか。三つめの問題は、本論の最後に触れるつもりである文献との照応についてである。文献の上で語形カエルは古くから「かえる」であって「おたまじゃくし」を意味していたという資料をいまのところ見出すことができないということである。

2.3 解釈の3

ここでは、まず第3図「おたまじゃくし」で、カエル(ノ)コ・カエルなどカエル類の分布が、国の両端地域にまで広く及んでいることに注目する。解釈の1・2ではカエル(ノ)コの分布を、「その親」である「かえる」の名称カエル類の分布の広がりに伴わずしてそれよりもっと急速に広く分布した「おたまじゃくし」の名称カエル類であると見たが、解釈の1・2の問題点としてふれたように、それにしては「おたまじゃくし」の名称であるカエル類の分布はあまりに広すぎる。そこで、「おたまじゃくし」におけるカエル類の分布の広がりには、「その親」である「かえる」におけるカエル類のかつての分布領域を示しているとするのである。つまり、「おたまじゃくし」の名称カエル類の分布が国の両端にまで及んでいるのは、「その親」である「かえる」の名称のカエル類もかつては全国を覆って分布していたことを示しているとするのである。次に注目すべきは、第1図「かえる」・第2図「ひきがえる」において、ヒキ・ビキを語形に含むヒキ類が、国の南北にほぼ第3図「おたまじゃくし」におけるカエル類と同じ範囲の広がりをもって分布していることである。これは、「かえる」もしくは「ひきがえる」の名称のヒキ類が、カエル類の分布と同じ時期に全国を覆っていたことを示している。カエル類とヒキ類の同じ時期における共存ということは意味分担が行なわれたことに外ならない。それがどのようになされたか。結論から言うと、カエル類が「かえる」の名称でありヒキ類が「ひきがえる」の名称であったということである。その理由の一つは、「お

たまじゃくし」の名称カエル類の分布の広がりによって「その親」である「かえる」の名称のカエル類の分布の広がりを推定したのであるから、「その親」というのは総称としての「かえる」とするのが妥当であろう。したがってヒキ類は個別称としての「ひきがえる」の名称であったとする。二つめの理由は、第1図「かえる」と第2図「ひきがえる」におけるヒキ類の分布の広がりをみると、第1図「かえる」においては分布領域が限られているのに対して、第2図「ひきがえる」においては先島諸島を除いてはほとんど全ての地域に及んでいるという勢力の強さをもっていることである。そこで、もともと「かえる」の名称であったカエルは全国を覆って分布しており、それとともに「かえるの子」である「おたまじゃくし」の名称カエル(ノ)コも全国のすみずみまで分布していた。この時期、「ひきがえる」の名称はヒキ類であってそれがほぼ全国を覆って分布していた。ただ、先島諸島までこのヒキ類が及んでいたかどうか。それについては、第1図・第2図・第3図いずれにもヒキ類の語形が全く分布していないので、一応ヒキ類の勢力はここまでは及ばなかったとしておくが断定はできない。

このように、解釈の3は「かえる」と「ひきがえる」とを区別する名称がもともとあったとするものであり、これは、解釈の1・解釈の2のもともと区別する名称がなかったとする考え方と全く対立するものである。

次の時期はどうなるか。3枚の地図を重ね合わせてみる。語類同士重ね合わせになる分布を示す地域がいくつかある。東北の大部分、紀伊半島南部、中国西部、四国南部では、「かえる」がヒキ・ビキ、「ひきがえる」がヒキを語形に含むヒキ～・ビキ～・～ビキ、「おたまじゃくし」がカエル(ノ)コである。北海道、福島・新潟・関東・近畿・中国北部では、「かえる」がカエル、「ひきがえる」がカエルを語形に含むヒキガエル・～ガエル、「おたまじゃくし」がおたまじゃくシである。つまり、前者の地域では「かえる」・「ひきがえる」がヒキ類にまとまり、「おたまじゃくし」がカエル類になっている。後者の地域では「かえる」・「ひきがえる」がカエル類にまとまり、「おたまじゃくし」がおたまじゃくシになっている。換言すると、これらの地域では、「かえる」と「ひきがえる」とが同類語を、「おたまじゃくし」がそれと別類語をもってい

ると言える。この傾向は奄美・沖縄本島およびその周辺地域についても言える。「かえる」がヒキ・ビキ・アタビキ・アタビチャーなどヒキ類であり、「ひきがえる」も同じくヒキを語形に含む～ビキであるのに対して、「おたまじゃくし」はこれと全く別類語をもつ傾向を示している。このように、全国のかなり広い地域に、「かえる」と「ひきがえる」とを同類語で、「おたまじゃくし」をそれと別類の語で示す傾向を3枚の地図に見ることから、この時期に全国的にこのような現象が起きたと見ることができる。そこで、国の中央部地域から「おたまじゃくし」の新しい名称オタマジヤクシが広まるにつれて、これらの地域では「かえる」の総称の意味をもつカエルが「ひきがえる」をも含めた名称となって「おたまじゃくし」と区別するようになる。国の中央部から遠隔のかなり広い地域、つまり新しいオタマジヤクシの分布のまだ及ばない多くの地域では、もともとの「おたまじゃくし」の名称カエル(ノ)コをそのまま保存しているため、「おたまじゃくし」と全く別類語形をもとうとする「かえる」・「ひきがえる」には、それをまとめた名称として、もともと「ひきがえる」の名称であったヒキ類を与えることになったのである。

九州についてはやや異なった変化過程があったと考える。もっとも古い時期「おたまじゃくし」がカエル(ノ)コ、「かえる」がカエル、「ひきがえる」がヒキであったことは他の多くの地域と同様である。第2図「ひきがえる」ではワクド類とドンク類が九州全域にそれぞれの領域をもちながら広く分布しているのに対して、第1図「かえる」におけるワクドとドンクの分布は局地的である。このことから、もっとも古い時期のあと、「ひきがえる」の名称としておもに九州東部でワクドが、おもに九州西部でドンクが生まれ分布を広めた。そのために、今まで「ひきがえる」の名称であったヒキ類は「かえる」の名称としてそのすわる位置を換え、したがってカエルは「かえる」の名称としての場から追いつき出されて消滅してしまう。それが第1図「かえる」におけるヒキ類のかなり広い領域の分布である。第3図「おたまじゃくし」におけるヒキ類の分布は、「おたまじゃくし」がカエル(ノ)コであったこの地域に、「かえる」の名称として新しく入ったヒキ類に伴ったビキ(ノ)コである。次の時期、「かえる」と「ひきがえる」の名称をまとめ、「おたまじゃくし」をそれと別にしようとする全

国的傾向が九州にも及んでくる。そこで、「おたまじゃくし」がカエル(ノ)コまたはヒキ(ノ)コであったため、「かえる」と「ひきがえる」をワクドまたはドンクにまとめ、その複合語形などを生み出しながら分布を広げつつあるのである。青森西部から秋田北部にかけての地域のモッケの分布についても、ほぼ同じ解釈がなされる。

全国的に「おたまじゃくし」の名称がカエル(ノ)コである地域では、「かえる」・「ひきがえる」の名称がヒキ・ビキ・モッケ・ワクド・ドンクなどカエルと全く別類語形となったため、カエル(ノ)コが「かえるの子」であるという意識をしいに失ない、したがって単独語形カエルに変形して何ら不自然不都合を感じないものになってしまう。第3図「かえる」において、カエル(ノ)コの分布と連続して単独語形カエルの分布が見られるのはこのためである。

解釈の3での歴史的変化過程を図示すると次ページのようになる。

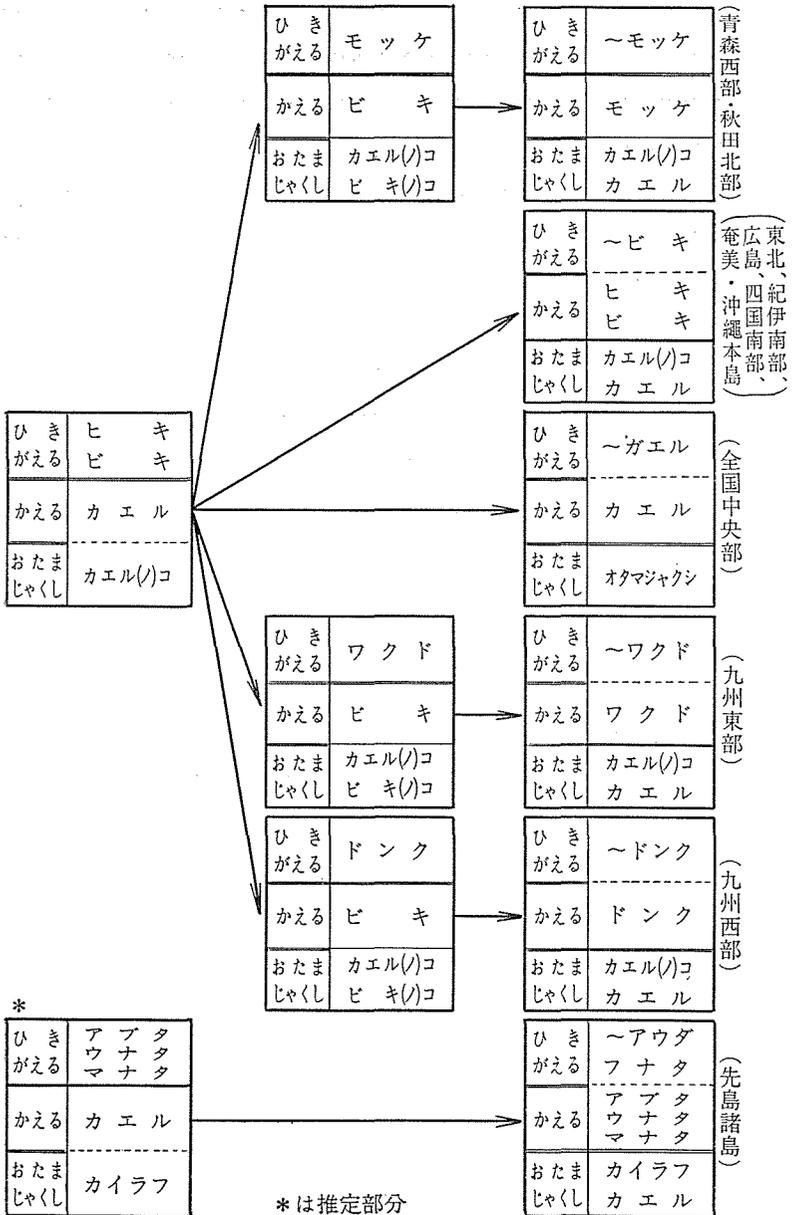
解釈の3において、解釈の1、2で問題としたことが解決したと考える。

3 文献にみられる語

カエルは『催馬楽』に「可戸留」の例を見るし、『新選字鏡』にも「蛙鼈加戸留、蛄加戸留」があるので文献の上で古い。それに対してヒキも、『新選字鏡』に「蟬比支」とあるのでこれもかなり古いものと言えよう。『本草和名』には、ヒキについて「蝦蟇……一名蟾蜍……和名比支」としか記されていないが、カエルについては「鼈子小形蟾蜍……和名加倍留」とあってややその特徴が示されている。『和名抄』では更に、「蛙……和名賀明流蝦蟇也」「蛙鼈……和名阿末加閉流形小如蝦蟇而青色者」「蟾蜍……和名比岐似蝦蟇而大陸居者也」のようにカエルとヒキの違いについてかなり具体的に記述している。この区別は現在とほぼ同じとみてさしつかえないであろう。このように、文献の上で、カエルとヒキが語として古くから存在ししかも区別して使われていたということは、解釈の3の結論にも有効な意味をもつと言えよう。

「おたまじゃくし」については、古く『和名抄』に「蛞蝓活東二音蛞蝓也……蝦蟇子也」をみるが当時の正確な和名を知ることができない。かなり時代が下って『和漢三才図会』に「蛞蝓活師 活東 玄魚 懸針 水仙子 加閉流古」とあってはじ

3. 文献にみられる語



めてカエルコの例をみる。一方、オタマジャクシについては『本草綱目啓蒙』に、「蛭斗……オタマジャクシ江戸」とあるにすぎない。このように「おたまじゃくし」の名称の歴史を文献の上からたどることは、いまのところかなりむずかしいように思われる。

お わ り に

地理的分布から、解釈の3が問題の残らないもっとも有力な解釈とした。それは文献とも矛盾しないものである。しかし、解釈に関与させなかったカワズ・ガマなどの中にあるいは解釈の重要な鍵をにぎっているものがあるかもしれない。それについては、管見の文献資料の少なさを補う必要があるということとともに今後更に考察を加えなければならないことである。